

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖入の句 】

きたれ、ハリスト スの ま え に ふ し お が
来 前 伏 拜
ま ん。か み の こ し よ り ふ く か つ せ
神 子 死 復 活
し し ゅ よ 、 な ん ぢ に ア リ ル イ ヤ を た て ま つ
主 爾 奉
る も の を す く い た ま え 。
者 救 給

【 復活のトロパリ 第4調 】

し ゅ の お ん な で し は ふ く か つ の ひ か る お と
主 女 弟 子 は 復 活 の 光 お 音
づ れ を て ん し よ り き き う け て 、
天 使 聞 受
げ ん そ よ り の て い ざ い を ふ る い す て 、 し と 徒
原 祖 定 罪 を 振 棄
に ほ こ り て い え り 、 し は ほ る ぼ さ
誇 日 死 滅
れ、 ハ リ ス ト か み は ふ く か つ し て 、 せ か い に
神 復 活 世 界
お お い な る あ わ れ み を た ま え り 。
大 憐 賜

【 三歌齋經のトロパリ 第2調 】

じんじなるハリスト スか みよ 、 われらなんぢのし
 仁慈 神 我 等 爾 至
 じょうなるせいぞうにふくはいして、わがしよざ
 淨 聖 像 伏 拜 我 諸 罪
 いのゆるしをもとむ、けだしななんぢ
 赦 求 蓋 爾
 はそのつくりしものをてきのどれいよりすく
 其 造 者 敵 奴 隷 救
 わんために、あまんじてみにてじゅうじかにのぼり
 爲 甘 身 十 字 架 升
 たまえり。ゆえにわれらかんしゃしてなんぢ
 給 故 我 等 感 謝 爾
 によぶ、せかいをすくわんためにきたりし
 呼 世 界 救 爲 來
 わがきゅうせいしゅよ、なんぢはしゅうじんを
 我 救 世 主 爾 衆 人
 よろこびにみてたまえり。
 欣 喜 満 給

【 復活のコンダク 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、
 光 榮 父 子 聖 神 歸

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世世

わがきゆうせいしゅおよびしょくざいしゅはかみと
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神

して、ちにうまれしものをかせより
 地 生 者 梛 梛

ときて、はかよりふくかつせしめ、
 釋 墓 復 活

ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして
 地 獄 門 破 主 宰

みっかめにふくかつしたまえり。
 三 日 目 復 活 給

【 三歌齋經のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世世

しょうしんぢよよ、かぎられぬちちのことばは
 生 神 女 限 父 言

なんぢよりみをとりにおのれをかぎり、
 爾 身 取 己 限

けがされたるぞうをしんせいなるびれいにあ
 汚 像 神 聖 美 麗 合

わせて、いにしえのさまにかえしたま
 古 状 復 給

え り 。 わ れ ら は す く い を う け と め て 、
 我 等 救 承 認
 お こ な い と こ と ば を も っ て こ れ を あ ら わ
 行 言 以 之 顯
 す 。

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拜せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行なう者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、 我等卑しくして不當なる 爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拜讚榮を 奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が 靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て 爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる生
 しんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 神女と古世より 爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせい のものよ、われらをあわれめ
 常生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせい のものよ、われらをあわれ
 常生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせい のものよ、われらをあわ
 聖 常生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとこせいしん
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせい のものよ、われらをあわ
 聖 常生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせい のものよ、われらを
 毅 聖 常生 者 我 等

あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 大齋第一主日第 4調 諸祖の歌 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん
慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) しゅ わ せんぞ かみ なんぢ さんよう なんぢ な よよ さんびさんえい
プロキメン、主、我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世に讃美讃榮せら
る、

しゅ わ が せ んぞ の か み よ 、 なんぢ は さんよう
主 我 先 祖 神 爾 讃 揚
せ ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんよう せ
爾 名 世 世 讃 美 讃 揚
られん。

誦經) けだしなんぢ およ われら おこな こと おい ぎ
蓋 爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり、

しゅ わ が せ んぞ の か み よ 、 なんぢ は さんよう
主 我 先 祖 神 爾 讃 揚
せ ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんよう せ
爾 名 世 世 讃 美 讃 揚
られん。

誦經) しゅ わ せんぞ かみ なんぢ さんよう
主、我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、

なんぢ の な は よ よ に さんびさんよう せ ら れ ん。
爾 名 世 世 讃 美 讃 揚

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、信に由りてモイセイは長ずるに及びて、ファラオンの女の子と稱えらるるを辭

みて、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、寧ろ神の民と共に苦しまんことを願ひ、ハリ

ストスに縁る誹毀を、エジプトの寶よりも更に大なる富なりと意えり、蓋彼は賞を

仰ぎ望めり。我復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムソン、イエツファイ、ダヴ

イド、サムイル、及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由り

て諸國を従え、義を行ひ、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を

避け、弱きよりして強くせられ、戰に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復

活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るるを欲せずして、酷

く戮されたり、他の者は嘲弄と鞭扑と、又縲紲と圜圖との試を受け、石にて撃たれ、

鋸にて解かれ、拷問に遇わせられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離し、

窮乏、患難、辛苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に

徨えり、此等皆信に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、蓋神は

我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん

爲なり。故に我等も證者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻む罪

とを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、我等の信の首、及び成全者

イイスを仰ぎ望むべし。

(比較用 口語訳) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義

を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

【 アリルイヤ 正教の主日の 第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦経) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦経) アリルイヤ、



誦経) ^{しさい うち およ かれ な よ もの うち} 司祭の中にモイセイ及びアアロンあり、彼の名を呼ぶ者の中にサムイルあり、



誦経) ^{かれらしゅ よ しゅこれ き} 彼等主に呼びしに、主之に聴けり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の ^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる ^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ}誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所 ^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書5端 1章43~51節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき ゆ ほつ あ これ い}謹みて聴くべし、彼の時イイスス、ガリレヤに往かんと欲し、フィリップに遇いて、之に謂
^{われ したが ひと およ まち おな}ふ、我に従え。フィリップはヴィフサイダの人にして、アンドレイ及びペトルと邑を同じ
^{あ これ い われら そのりつぼう およ}くせり。フィリップはナファナイルに遇いて、之に謂う、我等は、モイセイが其律法に、及び
^{しょよげんしや する ところ もの あ こ ひと}諸預言者が記しし所の者に遇えり、是れイオシフの子、ナザレトの人、イイススなり。ナ

ファナイル^{これ い}之に謂^{あに}えり、^{よ もの い}豈ナザレトより善^いき者^{きた}の出づるあらんや。フィリップ^み曰く、^{いわ}来^{きた}りて觀^み
 よ。イススはナファナイルの^{おのれ}己^{きた}に來^みたるを觀^{かれ}て、^さ彼^いを指^みして曰^{まこと}く、^い視^みよ、^{まこと}誠^しにイスライ
 リ人^{じん}にして、^{いつわり}詭^{もの}譎^{もの}なき者^{もの}なり。ナファナイル^{かれ}彼^いに謂^{なんぢ}う、^{なに}爾^{なに}何^よに由^{われ}りて我^しを知^しれるか。イ
 スス^{こた}答^いえて曰^{いま}えり、^{なんぢ}フィリップ^よが未^{さき}だ^{なんぢ}爾^いを呼^{なんぢ}ばざ^いる先^{いち}、^{じく}爾^{した}が無^あ花果^{とき}樹^{われ}の下^{われ}に在^{われ}る時^{われ}、我^{われ}
^{なんぢ}爾^みを見^{なんぢ}たり。ナファナイル^{こた}答^{かれ}えて彼^いに謂^{ラヴィ}う、^{なんぢ}夫子^{かみ}、^こ爾^{なんぢ}は神^{なんぢ}の子^{おう}、^{なんぢ}爾^おはイスライ^うリの王^うな
 り。イスス^{こた}答^いえて曰^{われ}えり、^{なんぢ}我^いが^い爾^よを無^{なんぢ}花果^{しん}樹^{しん}の下^{しん}に見^{しん}たりと^{しん}言^{しん}いしに^{しん}因^{しん}りて、^{しん}爾^{しん}信^{しん}ず、
^{なんぢ}爾^{これ}此^およりも^{おい}大^{こと}なる事^みを見^{また}ん。又^{かれ}彼^いに謂^{われ}う、^ま我^ま誠^まに^{こと}誠^{なん}に^ぢ爾^ら等^つに語^{これ}ぐ、^{なんぢ}是^{なんぢ}より^{なんぢ}爾^{なんぢ}
^ら等^{てん}は天^{ひら}開^かけて、^{かみ}神^{つか}の使^{いら}等^{ひと}が^こ人^うの子^えの上^のに^{ぼり}陟^{くだり}降^みするを見^みん。

(比較用 口語訳) イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従っ
 てきなさい」。ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。このピリポがナタナエ
 ルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にするしており、預言者たちがしるしてい
 た人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、な
 んのよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。イエスはナタナエルが自分の方
 に来るのを見て、彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その
 心には偽りが無い」。ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて
 言われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。
 ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。イエスは答えて
 言われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見たとき、わたしが言ったので信じるのか。こ
 れよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう。また言われた、「よくよくあなたがたに
 言っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るであ
 るう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ